

アリ語の「ことわざ」と「なぞなぞ」

柘植洋一

(金沢大学)

tsuge@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

0. はじめに

なぞなぞやことわざが、その言語を話す人々の生活に深く浸透し、生活の一部になっていることは今更取り立てて言うまでもない。その人々が暮らす世界，作り上げてきた文化を様々に反映しているとともに，そこに現れる表現は，当該言語の口頭での表現のあり方の可能性を示すものでもある。

筆者が調査を行ってきた，エチオピアの南部諸民族州で話されるオモ系のアリ語についても同様のことが言える。エチオピアの諸言語のなぞなぞやことわざに関しては，全国共通語としての役割を担ってきたアムハラ語の場合には，エチオピア内外で多くの出版物があるが，それ以外の言語については，近年その数が増えてきているもののまだ多くはない¹。ことに，まだ基礎的な言語構造の記述が進んでいないオモ系の言語については，筆者の知る限りはまとまった形での報告は為されておらず，新しいデータの蓄積が求められている。そこで本論にはアリ語の例を報告し，内容，形式の両面についての解説を加えて，そのあり方の一端を提示することで，いささかでもそのギャップを埋めようとするものである。なお，アリ語は文字で書かれることが無いために，文字で書かれる言語の場合に比べて，個々の例の言語表現が

¹ エチオピアのことわざについては柘植(1995)を参照のこと。比較的最近のことわざ集としては，Renate Richter und Eshetu Kebedeがある。これにはアムハラ語を中心に，オロモ語，ティグリニア語のことわざが収められている。ただし，訳は付されているものの説明はない。なぞなぞについては柘植(1984)を参照のこと。エチオピアの諸言語のことわざやなぞなぞについての報告，記述の中で優れたものとして，グラゲ諸語について扱った，Leslau (1982, pp.215-317)を挙げておく。そこでは，格言，迷信などの類も含めて豊富な実例を挙げながら，詳しい内容解説だけでなく形式についても分析がなされている。

固定化される度合いは多くの場合低い²。従って本論で取り上げた例についても、多くのバリエーションが存在することは当然考えられる事態であることをあらかじめ断っておく。

1. アリ語の「ことわざ」³

1.1. 「ことわざ」を意味するアリ語

インフォーマントによれば、アリ語で「ことわざ」にあたる表現は *alqit iki* あるいは *alq* という。また、アムハラ語の *mæssale* をアリ語化した *missale* も使われるとのことである⁴。*alq* は語幹 *alq-*「語る」からの名詞形である。また、*alqit iki* という語形は「*alq* の *iki*」の意味であるが、*iki* という語の意味は不明である⁵。

アリ語には音声による言語表現に関わる語根が種々存在するが、それらの中で広い意味領域をカバーするものは *keez-*、*gay-(gaa-)* と *alq-* の3つであるといえよう。まだ詳しい意味分析を行ってはいないが、これら3種の語根の基本的な意味はおおよそ次のように特徴付けることが出来よう。

(ア) *gay-* : < 音声を発する, 言う >

noo koyn gaysee. 「彼はこう言った。」

彼 これ 言った

*naami-hant hay-ee gayso goyse.*⁶

名前-君の 誰-だ 言って(副) 彼は尋ねた

「『君の名前は何か?』と彼は尋ねた。」

この動詞では、内容伝達面よりは、音声を発すること自体に重点が置かれている。また、第2例に見られるように、様々な伝達動詞とともに、その内容を引用する形の「〜と(言う, 尋ねる, 呼ぶ, 聞く, など)」という表現において、多くの場合副動詞形で用いられる。

² なお、アリ語の文字化をめぐる状況については柘植(2009)を参照のこと。

³ 本論での資料は1990年から2008年にかけて、Bellete Wuleta氏(ビーヨ方言)、Taffese Aseffa氏(ビーヨ方言)、Dagne Gabre氏(バコ方言)から教授いただいたものである。辛抱強く付き合ってくれたお三方に心より感謝する。

⁴ 音韻表記について。母音: 長母音は短母音を重ねて記す。子音: *ʃ* は [ʃ], *ɕ* は [tʃ], *ʔ* は声門閉鎖音。*q*, *ts'*, *ɕ'* は放出音。*β* は両唇入破音, *d* は歯入破音。

⁵ 語根 *iki-*「刺す」からの名詞で、「短く鋭い表現」という可能性もあろうか。

⁶ 例文およびグロス中の「-」は形態素境界を示す。ただし、形態素境界全てを記してはいない。なお、「定」=定冠詞, 「副」=副動詞, 「命」=命令形。

(イ) keez- : <ある種の内容を口頭で伝達する>

ita wore-n kiin keesisitee. 「私はその知らせを彼に伝えた。」

私 ニュース-定 彼に 伝えた

hant naami-n iin keeska. 「あなたの名前を教えてください。」

君の 名前-定 私に 伝えろ (命)

このように、keez-は「(内容を)伝達する」という面が中心である。因みに、名詞形 keeza は「知らせ」という意味で用いられる。

(ウ) alq- : <話をする>

maa alq nanašda. 「女は話し好きだ。」

女 話 好きだ

noo muda sets' inti alqdee. 「彼はいつも独り言を言っている。」

彼 毎 日 自分 話す

alq-では、「伝達される内容そのもの」に焦点があてられる。

このように alq-という語根は、語りそのもの、語りの内容に焦点が置かれている。単なる情報の伝達や、音声表出だけではなく、内容を持った語りであるという点が重要であるという点から、それにふさわしいものとしてこの語が選ばれたのであろう。アムハラ語でも məssale という語とならんで、「物語」を意味する tārāt という語が「ことわざ」の場合にも使われていることが想起される。

1.2. アリ語のことわざ

以下にアリ語のことわざの中から 20 例を挙げ、内容面と形式面について説明を加える⁷。

(1) fič'a laqami gayso gufa-hant hay gerka.

土地 良い 言って (副) 棒-お前の 否定 残せ (命)

doobi dakki gayso gufta-hant hay gerka.

雨 無い 言って (副) 皮-お前の 否定 残せ (命)

⁷以下、(1), (11)~(16)は Bellete 氏, (3)'は Taffese 氏, (2)~(10), (17)~(20)は Dagne 氏による。

「土地が良いといって、お前の掘り棒を置いてくるな。
雨が降らないからといって、お前の皮を置いてくるな。」

アリの人々の生業はエンセテ⁸、ソルガム、トウモロコシ、イモ類、それにコーヒーなどの栽培を中心とする農耕である。ここで「耕し棒」と訳した *gufa* は、一般的に「棒、杖」を意味するが、土地を耕すにあたってアリ人は地面を掘る棒 (*boyra* と呼ばれる) を使うので、ここでは「掘り棒」と訳した。*gufta* は「皮」であるが、ここでは雨よけに使われる動物の皮を指す。農耕にあたっての基本的な心構えを述べつつ、何事においても準備万端怠りなくすることの重要性を述べている。

このことわざは極めて整った対句をなしている。二連とも全体の構造が同じであるだけでなく、*gufa* と *gufta* という音韻的に類似した語形が効果的に用いられている。上述のように *gayso* は動詞 *gay-* の副動詞形で、ここでは日本語の「～と」にあたる。*hay* は命令形の前に置かれてその否定 (= 禁止) をあらわす。

- (2) *akčakča fič'a-r hačae.*
鳥の名前 地面-上 降りない
fič'a-t ha?mi-gir hayy utae.
地面-の 割れ目-中 太陽 昇らない

「アクチャクチャは地上に降りない。太陽が地面の割れ目からは昇らない⁹。」

アクチャクチャ (大型の鳥の名前) は常に大空を舞っており、地面に降りることはない。太陽も地面の隙間から昇っていくのではなく、遠くの地平線から顔を出してくる。それが当たり前のことである。

- (3) *ha-baab baam-sink balši waa-ke-e.*
君の-父親 首長になる-と インジェラ 肉-と-だ

「君のお父さんが首長 (バービ) になれば、インジェラは肉とだね。」

⁸ 重田眞義(2003)を参照のこと。

⁹ 原文では「割れ目の中」とあって、「から」にあたる語は使われていないが、話者の説明に従って、このように訳した。

首長と訳したバービは、伝統的なアリ人社会にあって、アリの9つの地域のそれぞれにおいてその頂点に立つ人である¹⁰。

インジェラは、元来、エチオピアの高地に住むアムハラ人たちの主食で、テフというイネ科の植物から作られる薄いクレープ状の食物である。アリ人の住む地域は20世紀末のエチオピア皇帝メネリク二世の時代にエチオピア国家に組み込まれ、アムハラ人主体の支配下に置かれることになった。その結果多くの面でその影響を受けることになった。言語面でも、個別の語彙の流入だけでなく、日常的に使われる数詞も十位の数がアムハラ語形に取って代わられたりするなどの種々の影響が指摘できる。食生活でもインジェラなどの食物も入ってきた。ただ、その場合も本来のテフは高価であり、小麦などによる代用もしばしばなされる。

このインジェラは、ワットと呼ばれる、スパイスのきいたシチュー状のおかずとセットで食べられるのが基本である。ワットには羊や鶏肉を主にしたもの、豆を主にしたものなど多くの種類があるが、もちろん肉は高価であり、滅多に口には出来ない。しかし、父親がバービになれば、ご馳走にもありつける次第である。

なお、このことわざについては、若干異なる次の形も採集した。

(3) 'ha-baab baami-sik balši-ke waa-ke-e.

君の-父親 首長になる-と インジェラ-と 肉-と-だ

(4) gibgibdoo gidi kašmaee.

急ぐ(副) 半分 分けられない

「急いでいる時には物を半分に分けることは出来ない。」

gib-「急ぐ、早い」という動詞であるが、ここでは「急いでいて、急ぎながら」の意味で、副動詞形として使われている。注目すべきは語幹が繰り返されていることである。重複語幹が用いられるのは定動詞の未完了形の場合であって、本例のように副動詞形で重複語幹が用いられるのは例外的である。全体としてコンパクトな構造を用いるために、通常では見られない形が使われたのであろう。

(5) dakki-deyk lostri-ee.

無い-ので 誇り高い-だ

¹⁰ バービについては Gebre(1995),p.18 以下を参照のこと。

「彼は何も持たないのに、プライドが高い。」

「武士は食わねど高楊枝」といったところか。deek(dayk)は理由の従属節を導くが、ここでは譲歩の用法が見られる。

(6) mata qasa-k qaw-k eed ke-ee.

頭 シラミ-と ジャングル-と 人 一緒-だ

「頭とシラミ，森林と人は一緒だ。」

シラミと頭の関係と同じく，人間の生活と森林は切り離すことが出来ない。

(7) aksi mang esayiindeteen šooni maal-e.

犬 狩り 知らない ネズミ戸口-だ

「狩りをしない犬だと，大ネズミが戸口にやってくる。」

犬がいても役立たない犬ならば，ネズミが大きい顔をしている。「待てば海路の日和あり」のように，「じっと待っていれば事態が好転する。」という意味合いで使われるようである。

(8) baača-t qanti norti-gir-ee.

ニワトリ 辜丸 お腹-中-だ

「ニワトリの辜丸はお腹の中にある。」

ニワトリの辜丸は外からは見えないが，中にしっかりとしまわれている。才能のある者は見かけからだけでは分からない。（「能ある鷹は爪を隠す」）あるいは，人に知られたくない秘密はしっかりと漏れないようにしておくべきだという意味でも使われる。

(9) ey-baab de?sink debi eer-ee.

家 主人 死ぬ-と野獣 家-だ

「主人が死ぬと，野獣たちが家に入ってくる。」

一家を支えていた主が亡くなると、周りの人たちがその家庭に入り込んで勝手なことをし、滅茶滅茶にしてしまうものだ。

(10) waala yi-toon-zen fič'a-ee.

ネコ 自分-糞-上 土-だ

「ネコは自分の糞に土をかける。」

ヒトは自分の失敗や秘密を隠そうとするものだ。

(11) goola-zen raats'i woč'araee.

ゴーラ-上 牛乳 飲まれない

「ゴーラと牛乳は一緒に飲むことはない。」

ゴーラはビール風のアルコール飲料。酒と牛乳を同時に飲むことがないように、反対のことを一度にすることは出来ない。woč'araeeは語根 woč'-「飲む」に受身を形成する-arがついた形である。

(12) inda-na-m šejjo yintsa-na-m teyka.

母-定-対格 見る (副動詞形) 女の子定-対格取る(命)

「母親を見て娘を娶れ。」

娘の現状を見ただけでは、その子の本当の姿までは分からない。また容姿もどうなっていくのかは分からない。母親の姿が正に数十年後の娘の姿なのだ。結婚しようとするなら、まず母親を見ること。

これは、アムハラ語のことわざ、

ənnat-wa-n aytäh ləjtwan agba.

母-定-対格 見て (副) 子-定-対格 結婚する(命)

と全く同じである¹¹。

(13) baača-na bašš-ink baštan buk gaatstsee.

ニワトリ-定 困る-と 小石-定 飲み込む

¹¹ Baeteman, col.660 参照。

「ニワトリは困って、小石を飲み込んでしまった。」

誰でも困窮状態，あるいはパニックに陥ると，訳の分からないことをしでかしてしまう。

(14) *saabi-t aafi hay ikka.*

神-の 目 否定 刺す(命)

「神様の目を刺すな。」

「神の目を刺す」とはいつも不平を言っている人について言う。格言的な表現である。

(15) *izzi gay-sink ibičča haaqe.*

ゆっくり-と 枯れ枝 木-だ

「枯れ枝でもゆっくり，ゆっくりと成長して木になる。」

そんなことは勿論無いものの，努力を続けていけば，いつかは報われる日も来るとのこと。アムハラ語のよく知られたことわざに，

qäss bäqäss ənqulal-u bā-əgru yəhedal

ゆっくりと 卵-定 で-足-定 歩く

「卵もその足で少しずつすこしずつ歩いていく。」

がある。

(16) *oota raats'i woč'č'-ink, quura ts'aammi toonsee.*

仔牛 ミルク 飲む-で カラス 白い 糞をした

「仔牛が乳を飲んだら，カラスが白い糞をした。」

「風が吹けば桶屋がもうかる」の類のことわざである。

(17) *aqmi haaqersinda balna haam bašdee.*

エンセテ 植えられた 運搬-定 君を こわがる

「植えたエンセテなのに，運ぶことは出来ない。」

エンセテは植えた時点では小さいが、成長すると数メートル、十数メートルになる。もうそうになると、その茎も根茎も運ぶのは一苦勞である。せっかく手をかけたのに、後になって裏切られるという事態について使われるという。

(18) qarmanda alfa turi-zen aysee.

鋭い ナイフ 肝臓-で 折れた

「尖ったナイフが肝臓で折れた。」

柔らかい肝臓を切り分けようとしたのに、ナイフが折れてしまった。熟達した人、経験の豊富な人でも失敗することがあるものだ。

(19) ee oo haagaysink eeree, ee oo haagaykink eed haamaree.

O.K. 君が言って 家へ O.K. 君が言わないと 人々 畑へ

「ハイと言えば家へ、ハイと言わなければ他人の土地へ。」

従順な人は温かく迎えられるが、そうでなければ他人のところで厄介になるしかない。

(20) ita-r buuč-i-k haana-r buuč-i-k buur hayi mukdee.

私-も ひげ-と 君-も ひげ-とうしろに 誰が 行く

「私も君もひげを生やしている。誰が後ろに行ったらよいのか？」

偉い人は髭をのばしているが、2人ともそうだったらどちらが偉いのだろうか。

2. アリ語のなぞなぞ

2.1. なぞなぞという名称およびなぞなぞの形式

「なぞなぞ」はアリ語では qaaraqaş という。ここで、なぞかけをする者を A、その問いかけに対して答えようとするものを B とすると、なぞなぞは例えば次のように展開する。

A: qaara qaš(oo) 「カーラカシュ (またはカーラカショー)」

B: qaš(oo) 「カシュ (またはカショー)」

- A: *inda-na wo?site wo?site gaadink* 『母親は止まる。止まる。』
 母-定 私は止まる私は止まる 言って
yintsa-na kayte kayte gaadaab eska. 『子どもは行く行く』は何?』
 子ども-定 私は行く 私は行く というもの 知れ
- B: *čaalkite* 「分からない。」
 私は出来なかった
- A: *fič'a iin imka.* 「土地をくれ。」
 土地を 私に くれ
- B: *gaylke šangaamak teyka.* 「ガリラとシャンガーマを取れ。」
 ガリラとシャンガーマ 取れ
- A: *kona tokte. siidok laydak gučka.*
 これ 少ない シードとライダ 増せ
 「足りないから、シードとライダもくれ。」
siidozen dooqsitoo laydazen dooqsitoo gaylke šangaamake
 シードに住んで、ライダに住んで、ガリラとシャンガーマ
qalaadi?ist maatstsisitoo hare?ist kae.
 土地 私 して 何 私の 欠けている
 「シードとライダに住んで、ガリラとシャンガーマも自分の
 土地にして、これで欠けているものはあるだろうか。」
- kona deysit seyniee.* 「答えは、挽き臼の石だ。」
 これ 臼の 石-だ

(ガリラ, シャンガーマ, シード, ライダはアリの地域名)

このような展開は,

A: *ənqoqəlləš* (または *ənqoqəlləh*)

ことわざ (君に尋ねよう)

「エンコークツルシュ (またはエンコークツルフ)

(君に尋ねよう)」

B: *mən awəqəlləš* (または *mən awəqəlləh*)

何 君に私が知ろうか

「ムン・アウクツルシュ (またはムン・アウクツルフ)

(何と答えようか?)」

で始まり、「土地をくれ」更に、「その土地をもらったらああして、こうして…」という形で続いていくアムハラ語のなぞなぞのやりとりを思い出させる。これは、Sahle Sellasie が活写している、チャハ語のな

ぞなぞのやりとりも同様であり、このパターンはエチオピアに広く見られるようである¹²。ただ、こうした類似パターンの成立に関する相互間の関係は不明である。

2.2. アリ語なぞなぞの例

ことわざに比べ、アリ語のなぞなぞはなかなか収集できなかつた。また収集した例の中でも十分にその意味が汲めないものもあり、ここでは上記例に加えて5例のみを提示するにとどめなければならない¹³。そのなかでも、(1)と(2)は、「なぞかけ」とそれに対する「なぞとき」からなる組み立てという点で、通常われわれが理解するなぞなぞと同じである。しかし、その一方で、(3)についてはインフォーマントがなぞなぞの例として挙げてくれたものの、Bにあたる部分がストレートに答えになっていないという点で異なっている。ただ、これに類似した例も(4),(5)を含め更に他にも数例採集したので、アリ語の qaaraqas は、謎解きだけではなく、このような例も含むものであると理解するのが妥当であろう。

(1) A: miri-n-gir dooqsoo mata-n leeqsdaab haree.

川岸-定-中 ある(副) 頭-定 ゆらすもの 何-だ

「川岸にあって頭を揺らして遊んでいるのは何」

B: meyts'-ee. 「それはシュロ」

シュロ-だ

miri は「水の流れ、小川」の意味で使われるがここでは、「川岸、あるいは低くなっている所」を指すという。

(2) A: tuu-goyr tuučī-na burtiee. 「岩の下にたくさんの結び目。」

岩 下 結び目-定 多い

B: waak-it ami-ee. 「雌牛の乳房。」

雌牛-の 乳房-だ

牛全体を岩に見立て、乳房が垂れている様をあらわしている。

¹² Leslau (1966), pp.166-169 参照。

¹³ 以下全て Dagne 氏による。

(3) A: qawla qaam-gir laqmaakoo. 「ソルガムの茎は耳の中に心地よい。」
ソルガムの茎 耳-中 美しいか

B: qam?i daaki-deyk qaara iin hay boystee.

貧乏 いない-のに 猿 私に 誰 見張る

「貧乏人がいないのに誰が私の為に見張ってくれるのか。」

A はソルガムの茎を切って作った笛状の楽器のことを言っている。B は、アリ人の畑の所々に小さな見張り台がたてられていて、そこに人がいて、猿や鳥を追い払う光景を指している。これはわれわれが通常考える「なぞなぞ」とは少し性格が異なる。つまり謎かけをして、その答えを得るというものではないように思える。あるいはそのように解釈することはなかなか困難であるとも言える。qa という音節が続いて現れるのを楽しむのであろうか。

(4) A: aani?int kae. 「自分の手がない。」

手-自分の 無い

B: afa dakki-deek haarak haalqistee.

口 無い て 何故 私が話す

「口が無くてどうして話せようか？」

(5) A: zaagi lo?ta kisraee.

ザーギ 皮をむいた 登られない

「樹皮を剥いたザーギ (=木の一種) にはのぼれない。」

B: zangat tiša ga?raee.

ザンガ-の ティシャ 食べられない

「ザンガ (=ソルガムの一種) のティシャ (=若く熟したものは), (苦くて)食べられない。」

これら(4)(5)も、(3)と同様に B は A への答えではない。いずれも対句的な表現であり、一種の言葉遊び的な要素を強く持った例である。特に(5)は(3)と同じく、構造上の効果的な対比に加えて、音韻面での頭韻、脚韻の効果が際立っている。

上述のように、ここでは 2.1.で挙げた例を含めても 6 例のみしか示すことが出来なかった。収集した数自体は勿論それよりも多いのであるが、語形あるいは意味の解釈が十分に説得的に示せない例がかなりの数に上るためである。今後こうした点をふまえ、更に多くの例を集

め、そこからアリ語におけるなぞなぞの特色を明らかにしていくことが必要である。

【参照文献】

- Baeteman, Joseph (1929), *Dictionnaire amarigna-français, suivi d'un vocabulaire français-amarigna*. Imprimerie Saint Lazare.
- Gebre Yintiso (1995), *The Ari of Southwestern Ethiopia*. Department of Sociology, Anthropology and Social Administration. Addis Ababa University.
- Leslau, Wolf (1966), *Ethiopians Speak. Studies in Cultural Background. II. Chaha*. University of California Press.
- Leslau, Wolf (1982), *Gurage Folklore*. Otto Harrassowitz.
- Richter, Renate und Eshetu Kebede (1994), *Sprichwörter aus Äthiopien*. Rüdiger Köppe.
- 重田眞義(2003),「エンセーテ」 『月刊みんぱく』編集部(編)『世界民族博物誌』(八坂書房) pp.99-101.
- 柘植洋一(1984),「エチオピアのなぞなぞ」 柴田武, 谷川俊太郎, 矢川澄子編『世界なぞなぞ大事典』(大修館書店) pp.839-851.
- 柘植洋一(1995),「エチオピアのことわざ」 柴田武, 谷川俊太郎, 矢川澄子編『世界ことわざ大事典』(大修館書店) pp.819-830.
- 柘植洋一(2009),「文字は誰のものかーエチオピアにおける諸言語の文字化をめぐる」 梶茂樹・砂野幸稔(編著)『アフリカのことばと社会』(三元社) pp.249-279.